

# たすく



FREE

2023.01

「病院×神楽」

写真家・中村治が  
映画『高津川』の「左鐙社中」公演を熱写

「腎臓」最前線を知る

「不可逆性」「腎移植」「腎センター」



坂本 誠

鳥取大学医学部附属病院  
脳神経外科 准教授

鳥大の人々

●病院長対談

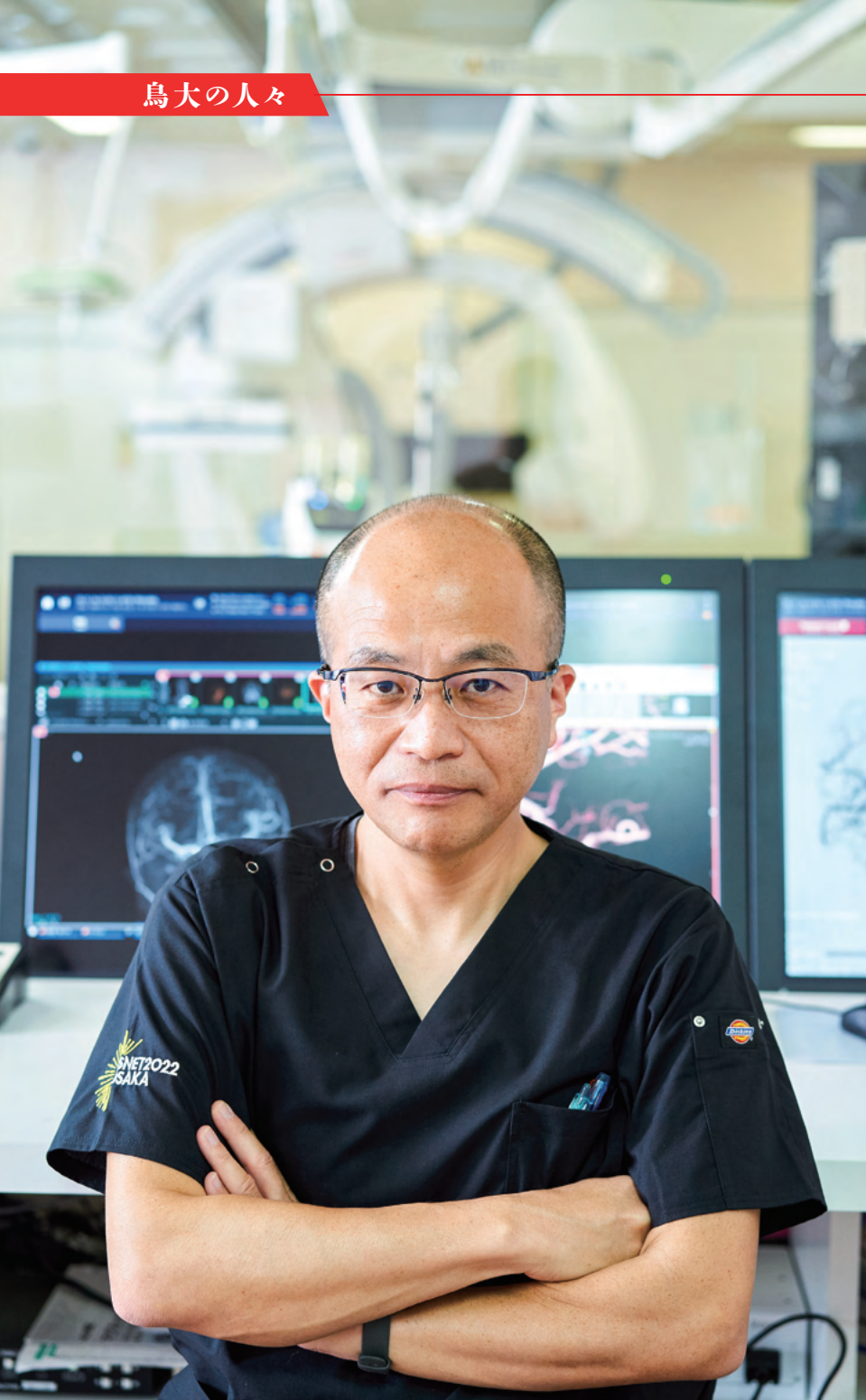
「たすくのタスク」木村皓一（ミキハウス代表取締役社長）

スイーツ上田の

「山陰」これ食っときゃ  
間違いない！

【好評連載】境港在住、駆けだし小説家の独り言「ふみ日記」





写真・中村 治

幸いだったのは、彼の父親が学校に行かないことをなじったり、叱ることはなかったことだ。せめて友だちとの関係をつないでおきたいと考えたのだろう、坂本を連れて毎朝校門まで行き、挨拶をさせた後、家に連れて帰った。

「教科書ガイドみたいな答えが書いてある参考書を使って一人で勉強していまし

「一日休むと次の日に行きにくくなる。病気じゃないのになんで休んでいるんだろうと友だちたちも考えているだろうって思うようになったんです。人の目がすごく気になって行けなくなっただけでしょうね」

坂本は1972年に兵庫県北部の美方郡美方町（現・香美町）で生まれた。山の谷間にへばりついたような小さな町で、冬になると大雪が降った。屋根の傾斜を使って櫓（きよ）で遊んだこともある。豊かな自然に恵まれた場所だったが、住民みんなが顔見知りという状況に息苦しさも感じていた。

自分の中で壁を作っていたんでしょ

ね、と坂本は首を振る。

「通っていた小学校では給食を誰が早く食べるかを競うことが流行っていた。負けたくないと考えた坂本が食べたふりをして捨てていたのを担任だった女性教師にみつかったしまったのだ。こっぴどく叱られ、翌日から学校に行かなくなった。登校拒否である。

坂本誠の人生最初の躰（からだ）きは、小学校3年生のときだった。

## できなかつた親孝行を 病気で困っているこの地の方々に返したい

坂本 誠 鳥取大学医学部附属病院 脳神経外科 准教授

カテーテルを使用した脳血管内治療のエキスパートとして日々大勢の診療を行なっている坂本は、小学校から中学校の間、不登校となり家にひきこもっていたという。そこから医師を目指し現在に至るまでの道を振り返ると、いつも見守ってくれた父親の存在があった。

病気にかからない、あるいは怪我をしないという人はいません。どんな人にとって医療は生活に切り離せない。しかし、敬遠したり、垣根が高いと感じる人も少なくありません。そこで、医療の世界を「いかに知ってもらおうか」↓「いかに知る」↓「カニジル」となりました。

もちろん、とりだい病院のある鳥取県の名産品、**蟹のだし（味噌）汁**にも掛けています。蟹汁のように、皆さまに愛される存在でありたいという思いを込めました。

「カニジル」が第一にこだわるのは「ファクト」です。

医療に関して、不正確な情報が世の中にはあふれています。短く、分かりやすい言葉は人々の心に突き刺さりやすい。しかし、現実はその簡単ではありません。分かりやすくするため、大切なものを多くそぎ落としています。

医療は、科学的に証明されていることとそうでないことを完全に二分できない世界です。その時点でのファクト＝エビデンスを重んじていても、そのファクト自体がひっくり返ることもあり得る。大切なのは、愚直に取材し、確かな文獻に当たり、真摯に考える——それが我々の姿勢です。

昨今の新型コロナウイルスに関する報道で「インフォデミック」という言葉を耳にした方も多いでしょう。これは情報が感染症のように拡散し現実社会に影響を及ぼす現象を指します。SNSなどの発達により、我々が手にする情報は爆発的に増えました。その中から、いかに正確な情報を選び取ることができるか。生命の危機にも直結する

# カニジル宣言

医学では、その力が特に必要になってきます。

米子市出身の経済学者、宇沢弘文は著書の中で「社会的共通資本」を「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置」と定義しました。また「一人ひとりの人間的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持するために不可欠な役割を果たすもの」とも書いています。

とりだい病院は、医療機関であると同時に、この地域でもっとも人が集まる場所です。《すぐれた文化を展開》し、《人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持》する可能性を秘めているという意味で、まぎれもない「社会的共通資本」であると我々は考えます。

とりだい病院のある米子市を含めた山陰地方は、「過疎」「超高齢化社会」という日本が抱える問題が凝縮されています。一方、人との温かいつながり、自然など、都会にはない豊かさがある。問題を解決しつつ、豊かさをどう維持していくか——。先んじて未来の問題を解決できる場所なのです。

新型コロナウイルスは日本社会の変化を促すことになりました。リモートワークが進めば、住む場所を選びません。都市と別の視線を持つことが、ウィズ・コロナ、アフター・コロナ時代のニューノーマルとなるかもしれません。

カニジルは、ファクト重視、地方からの文化発信にこだわっていきます。

## C O N T E N T S

03	鳥大の人々 ——鳥取大学医学部附属病院 脳神経外科 准教授
06	坂本 誠 「可逆性」腎移植「腎センター」 「腎臓」最前線を知る
10	病院×神楽 写真家・中村 治が 映画『高津川』の「左鑓社中」公演を熟写
14	スイーツ上田の 「山陰」これ食つときや間違いない！
16	病院長が時代のキーパーソンに突撃！ たすくのタスク——
20	株式会社ミキハウス代表取締役社長 木村皓一 境港在住、駆けだし小説家の独り言 「ふみ日記」 第四回
21	「協道」の景色もまた楽し とりだい「人生を変えた一冊」 薬剤部 森木邦明
22	カニジル——カニジルご意見箱 Totori Breath 現場を知ることの大切さ
23	鳥取大学医学科生「医師のため」 略して「とりたま」に訊け！ 飛鳥の森——編集後記
24	トリビート フォトグラファー 中村 治が切り取る、 とりだい病院の日常

### Kanijiru vol.12 Staff

スーパーバイザー  
結城豊弘  
黒崎雅道  
（とりだい病院 広報・企画戦略センター長）

編集長  
田崎健太

編集  
中原 由依子  
大川真紀  
井野琴音

写真  
中村 治

デザイン  
三村 漢  
大貫 茜

制作管理  
藤木雄一  
（今井印刷）



た。父親が知り合いだという教育実習生の方を連れてきたこともありました。でも一緒にドライブに行ったぐらいで、勉強を教わった記憶はないです」

小学校は一学年一クラス、担任は持ち上がることになる。結局、卒業まで小学校に行くことはなかった。

中学校進学を機に学校に通い始めたが、半年しか続かなかった。

「その中学は必ず部活に入らなくてはならなかったんです。バレー部とバスケット部しかなくて、バレー部を選びました。そうしたらすごい怖い先輩がいて、なんか萎縮しちゃって、また学校に行けなくなってしまった」

中学校も小学校と同じ一クラス。顔ぶれも変わらなかったことも一因だった。再び、自宅で学校と同じ時間割で自習する日々だった。

「学校と同じ時間割で、勉強するんです」

10代は悲観的になりやすい時期だ。自分の人生は終わったと暗い気持ちになることもあった。今度こそなんとかしなければならぬ、高校進学が最後のチャンスかもしれない。そう考えた坂本は同級生がほとんど進学しない養父市の八鹿<sup>や</sup>高校を選んだ。香美町から距離的には遠くないが、交通の便が悪い。過去、入学した生徒は高校の近くに下宿していた。自分は一人暮らしに向かないと坂本はバスに1時間乗って通うことを選んだ。

この人生の「リセット」に坂本は成功

した。高校では生物部に入り、親しい友人もできた。ようやくまともな学生生活が送れるようになったと安堵していた1年生の夏のことだった。

「期末試験を受けていたら、熱っぽくて調子が悪かったんです。そのまま試験を受けたんですが、お腹が痛くてどうしようもなかった」

病院に行ってみると虫垂炎をこじらせており腹膜炎となっていた。すぐに手術を受け、3週間入院することになった。

「同級生が宿題を持って来てくれたんで、病室でやっていました。そうしたら病院長が回診でやってきて、パラパラとぼくの持っているのを見て、医者になるかって言ったんです」

手術後、初めて口にした白湯の美味しさに感動した。その後、自分の身体がみるみる回復、医療の力を実感していた。医師も悪くないと思ったのだ。

生物部の友人たちとゲーム感覚で勉強したこともあり、隣県の鳥取大学医学部に現役で合格した。

### カテーテル治療の「師」との出会い

坂本の専門は脳神経外科である。脳神経外科は、脳外科とも呼ばれ、脳、脊髄、神経を専門に診断、治療する。脳卒中などの脳血管障害、頭部外傷、脳腫瘍などが該当する。

坂本が脳血管内手術と出会ったのは鳥



く働いている坂本に迷惑を掛けることはできなかったのだろう。

「術後の経過が良くなって痛みがずっと残っているというんです。子どもが医者をしているのに、何もしなかった。本当に申し訳ないことをしたなと」

父親は他にも持病を抱えており、鳥取市の病院を中心とした入院生活になった。坂本は可能な限り時間を工面して、病室に顔を出している。とりだい病院で診察中、いよいよ厳しいという連絡が入った。

「外来（での診察）を始めちゃっていったんで、途中で辞めることができない。終わってから行きました。担当の先生が気を遣ってくれたのか、人工呼吸器などはそのままでした。最期を看取することはできなかつたんですが、意識がなくなる前、

取大学大学院生のときだ。これはカテーテル——0.5㎜から3㎜の管を患者の足の付け根や腕から血管に挿入、大動脈を経由して頸部や脳の血管に誘導し、薬剤や器具を使用して行う治療である。」「脳神経外科でカテーテルを使った治療をやっているということも知りませんでした。ごく一部の医師が始めたばかりでした」

その後、とりだい病院の担当教授から薦められ、このカテーテル治療を東京の虎の門病院で研修することになった。ここで人生の師と出会うことになった。根本繁である。

根本は東京大学医学部卒業後、東京大学、自治医科大学などを経て、ドイツ、カナダに留学し、脳血管内手術の研鑽を積んだ。2002年に虎の門病院で「脳血管内治療科」を立ち上げていた。脳のカテーテル治療を掲げた専門科は日本初だった。

「立ち上げから2ヶ月は旭川から勉強にきていた先生がおられた。一日だけその先生から引き継ぎを、あとはほんとに根本先生の2人ですね」

カテーテル使用により脳内での出血、脳梗塞などの合併症が起きる可能性がある。根本の施術では、それがほとんどないことに舌を巻いた。

東京では虎の門病院から徒歩圏内、新橋のワンルームマンションを借りた。便利な場所ではあったが、築40年以上の古

声を掛けたときちょっとだけ反応がありました。それだけでも良かったかなと」

小学校で登校拒否をしたとき、父親が学校まで付き添ってくれなかったらどうだったろうかと思うことがある。今となつては、わざわざ子どもを学校まで連れていくという手間の重みが良くわかる。その恩のある父親に不義理をしたというずしりとした痛みが残った。

「ぼくにとっては大きな存在だったんです。困っている人がいるとすぐに手を差し伸べる。特に女性とか子どもに優しい人でした。人がやりたがらないことを率先してやる。すごいなと思っていました」

入院中も最後まで父親に感謝の言葉をきちんと伝えられなかったという。「大学病院などでは一人ひとりの患者さんと向き合う時間はどうしても少なくなってしまう。その中でもできるだけ話を聞いていこうと思うようになりました。できなかった親孝行を、病気で困っているお年寄りの方にできたらと」

山陰地区で、脳血管内治療を行う医師は限られている。大学病院の医師として、この地域の医療を継続していかなければならないという思いがある。後進を育てていくことが重要な仕事だ。若い医師たちには、自分と同じように他の地域に出かけて、知見を広げることが大切だと言いつづけている。

「ぼくの世代で途切れたら、何のためにやっていたのかという風になってしまう。

い建物だった。物見遊山の気分で銀座や渋谷などテレビで観たことのある場所に行ってみた。しかしそれもすぐに飽きた。「一人で回っても楽しくないことに気がついたんです。それからは仕事場とマンションの往復の毎日でした」

と笑う。坂本は根本と一緒に関東一円、東海地方の医療機関を回ることもあった。「脳血管内治療をやる先生がそんなにいなかったの、いろんなところから根本先生が呼ばれるんです。だいたいぼくが付いて行って2人で手術をする。根本先生と一緒に様々な症例の経験を積んだことは非常に大きかった」

さらに根本は脳神経血管学会の専門医試験のために東京大学医学部の勉強会を紹介してくれた。

「東大だけでなく、いろんな大学から勉強に来ていました。東大（医学部）のOBの先生たちが講義に来て資料をくれるんです。その資料の出来が良くて、すごく勉強になりました」

この勉強会でさまざまな医師と知己を結んだことは坂本の大きな財産となった。そして当初の予定通り、専門医試験を受験するため、東京生活は1年で切り上げることにした。

「今から考えれば、虎の門での生活は良かったので、もう少ししても良かったのかなと思います」

松江市立病院を経て、2005年にとりだい病院に戻った。根本と離れてみる

継続して高い水準を保たないと意味がないんです」

もちろんまだまだ自分の技量も磨いていかねばならないんですと付け加えた。そんな坂本の日々は多忙である。上司にあたる脳神経外科教授の黒崎雅道は、「坂本は可能な限り、部下たちの手術に付き合っている、その責任感には本当に頭が下がる」と証言する。

彼の唯一ともいえる気分転換は走ることだ。

「週に2日か3日走っています。土砂降りの中を走りたいくないので、天気予報を見ながら、その週の予定を組みます。ただ、決めた日が雨や雪でも走りますね」

治療と同じように、決めたことは絶対にやり抜くというのがぼくのポリシーなんですと微笑んだ。

文・田崎健太

1968年3月13日京都市生まれ。ノンフィクション作家、早稲田大学法学部卒業後、小学館に入社。「週刊ポスト」編集部などを経て独立。著書に「偶然完全 勝新太郎伝」「球童伊良部秀雄伝（ミズノスポーツライター賞優秀賞）」「電通とFIFA」「真説・黒川力」「真説佐田サトル」「スポーツアイデンティティ」（太田出版）など。小学校3年生から3年間鳥取市に在住。2019年、カニジル」編集長に就任。2021年、樫カニジルを立ち上げ、9月からとりだい病院1階で「カニジルブックストア」を運営中。

坂本 誠（さかもと まこと）  
兵庫県生まれ。1991年鳥取大学医学部卒業。2002年鳥取大学大学院医学系研究科外科系専攻博士課程修了。医学博士。公立八鹿（ようか）病院、虎の門病院、松江市立病院などを経て、2005年より鳥取大学医学部附属病院。2016年4月より現職。





# 腎臓最前線

## 腎臓を知る

不可逆性 腎移植 腎センター

腎機能は低下してもなかなか気がつきにくい。  
そして、厄介なのは腎臓は一度悪くなると、回復することがない——「不可逆性」の臓器であることだ。  
2022年、地域の方々の腎臓を守るため、とりだい病院に「腎センター」が立ち上がっている。  
その背景、理由取材した。

取材・文 カニジル編集部 写真 中村 治 イラスト 矢倉 麻祐子

腎臓は、一度悪くなると  
良くなることはない

腎臓は肝臓とともに沈黙の臓器と呼ばれる。その機能が著しく低下し、症状が進んでからしか気がつかない。医師にかかったときはすでに末期症状に入っていることが多いという意味だ。

「私たちは普段当たり前のようにご飯を食べて、飲み物を口にしています。その中から腎臓で身体に必要な物質は残して、不要な物質は捨てる。腎臓はフィルターのようなもの。正常に機能しなくなると、身体の中に毒が溜まっていくと考えてください」

隠れていますけど、非常に大事な臓器なのですと語るのは鳥取大学医学部附属病院、第二内科診療科群・腎臓内科長の高田知朗である。

腎臓は腰の上部の背中側に位置する。背骨を挟んで左右に一つずつ、握りこぶしより一回り大きく、そら豆のような形をしている。心臓から送り出される血液の約4分の1が腎臓に流れ込む。血液は「糸球体」でろ過されて、「原尿」となる。糸球体は毛細血管の塊である。糸球体を包む「ボウマン嚢」が原尿を集めて「尿管」に送る。「尿管」は原尿を通す際、必要な水分や栄養を再吸収する。身体に水分が足りないときは多めに吸収するといった具合だ。残りは老廃物として排出。

この糸球体とボウマン嚢、尿管を合わせて「ネフロン」と呼ぶ。

人間は腎臓一つあたり約100万個、計200万個のネフロンを持って生まれてくる。

「加齢あるいは糖尿病や高血圧などが原因で糸球体が詰まってしまい、数が減っていきます」

現時点でネフロンの残存数を計測することは不可能である。高田によると人によって差異があり、生まれつき少ない場合もあるという。その場合は残っているネフロンに負荷がかかっていることになる。このネフロンの特徴は「不可逆性」であることだ。減ってしまった、元に戻ることはない。長生きすればするほど、腎臓の機能は確実に落ちていく。我々ができることは、その下りを緩やかにすることだけだ。

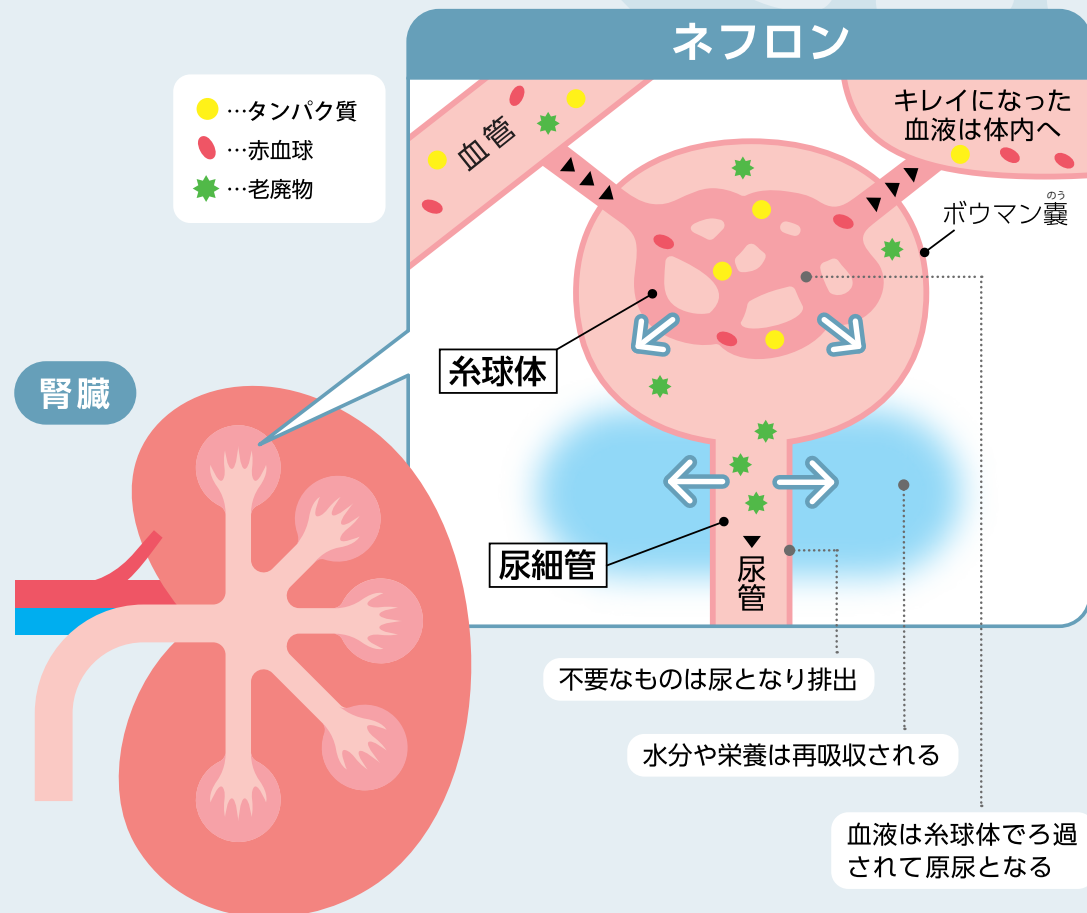
「腎臓に負担をかける要因としては、まず塩分の取り過ぎ。日本人の塩分摂取量は1日10グラム（男性11グラム、女性9グラム）とされていますが、腎臓の病気の方には6グラム以内と指導しています。タンパク質の摂り過ぎにも気をつけなければなりません。タンパク質は、ろ過されるとき、ネフロンに負荷をかけてしまう。若い人は問題ないんですが、腎臓の悪い高齢者が（サプリとして）プロテインを摂っていると注意が必要。大切なのは水分を多く摂ること。エアコンの効いた部屋は非常に乾燥しており、水分が不

足しがちになります。脱水状態になると血液が濃くなって、腎臓への流れが悪くなってしまうんです」

体重によって必要な水分量は変わって

くるが、1日2リットル以上が一つの目安となるという。

腎臓は沈黙の臓器ではあるが機能低下の兆候はある。むくみ、急激な体重増だ。





「靴下の跡がつきやすい、足のすねの部分をぐっと指で押して、跡が残ったら、注意が必要です。食生活に大きな変化がないにも関わらず、1ヶ月で1キロ、2キロ増えていたら、体内に水が溜まっている可能性もあります」

医療現場ではeGFR（推定糸球体濾過量）という数値が使用される。これは1分間あたり糸球体でろ過される血液量のことだ。年齢と血清クレアチニン値から算出する。

「正常値は100。そこから下がってきます。患者さんには100点満点で自分が何点かと考えてくださいとお話しています。慢性腎臓病と呼ばれるのがだいたい60以下です」

30を切ると尿毒症の症状が現れる。15未満は「末期腎不全」に区分され、透析療法、あるいは腎臓移植の準備に入る。

透析療法は、人工透析とも呼ばれる。血管に機器をつないで、腎臓の代替とするのだ。大量の水を必要とする人工透析の機器はかさばり、1回あたり4時間ほどかかる。患者にとって大きな負担だ。

腎移植は「慎重に」  
そして「用意周到」で  
なければならぬ

とりだい病院では腎臓には、2つの科が関わっている。一つは高田の腎臓内科、もう一つは泌尿器科である。

「腎臓内科は腎臓のスペシャリストで、基本的に腎不全になるまでを担当、移植に関しては外科手術が必要になるので泌尿器科が担当していると考えてください」

そう説明するのは、とりだい病院泌尿器科、腎センター長でもある引田克弥である。

「透析（療法）より腎移植された方が、生命予後（病気の経過が命に与える影響）がいい。食事や水分制限なども緩やかですし、生活の質が上がります。可能であれば、移植の方が望ましい」

可能であれば、と引田が言うのは、現在、透析を受けている患者は日本全国に約34万人いるのに対し、腎臓移植は年間2000例強に留まっているからだ。

腎臓移植には、亡くなった方の腎臓を使用する献腎移植と、患者の親族の腎臓を使用する生体腎移植の2種類がある。「本来は亡くなった方から提供を頂くといいのが望ましい。生体腎移植は健康な方の腎臓を片方取ることになります。そのため、どうしても提供してくださった方の腎機能が悪くなります。日本では腎臓だけでなく他の臓器も含めて提供してくださる脳死、あるいは心停止のドナーの方の数が少ない。そのため、献腎移植をご希望されても、かなりの待機期間があり、すぐに移植を行えないのが現状です」

心臓が止まり、血液が流れなくなれば

とりだい病院が  
「腎センター」を  
立ち上げた理由

2022年4月、とりだい病院外来棟2階に腎センターが立ち上がっている。

主導したのは、引田の上司、泌尿器科教授で副病院長でもある武中篤である。

「腎センターの目的の一つは、腎疾患の予防、そして早期に（医療）介入をして末期腎不全まで至らないようにすること。しかし、腎臓病というのは現状維持が最良。加齢とともにだんだん悪くなっていくので、現状に留めるのも難しい。末期腎不全になれば、腎センターで、透析治療、そして腎臓移植をやっていかなくてはならない」

医療には、属人性<sup>レ</sup>が高い分野がある。特定の医師の力によるところが大きく、その人間がいなくなれば、その病院での対応件数は一気に消滅する。山陰地区において、腎臓移植はまさにそうした分野である。

武中には、この地域の医療をとりだい病院が支えなければならぬという義務感がある。

「2020年のデータですが、10万人あたりの医師数が鳥取県は338・1人で全国第4位でした。この数字だけ取り上げると医療が充実しているように見えます。でも人口が少ないから医師の絶対数

腎臓の組織は壊死する。心臓マッサージ、カテーテルで体内に還流液を注入しながらの移植手術となり、時間的、技術的な難度は高い。日本において献腎移植の割合は約1〜2割程度。残りは生体腎移植である。

生体腎移植のドナーの基本的条件として、提供希望の方の腎機能が良いことや、治療していないがんが無いこと、活動性の感染症が無いこと等に加え、「6親等以内の血族、配偶者」「3親等以内の姻族」であること等がある。さらに第三者による自己意思による提供であることの確認、年齢制限もある。

「血液型が違ってもさまざまな術前処置を行うことで、現在大きな問題にならないことが多くなっています。（移植手術のうち）約半数の方が血液型の違うドナー。ドナーの腎機能が問題なく、感染症に感染していないこと、そしてHLA（ヒト白血球抗原）の組み合わせが極端に悪くなければ移植可能となることが多いです」

移植を受ける側にも条件がある。「感染症がないこと、がんに罹患していないこと。移植の際、拒絶反応を防ぐために免疫を抑えなければならぬ。もしがんに罹<sup>かか</sup>っていると一緒に広がってしまうんです。とりだい病院の場合ならば、胃がん、肺がん、肝臓がん、腎がん、大腸がん、膀胱がんがないか。また女性ならば子宮がん、卵巣がん、男性ならば前

は少ない。人口がたくさんいる都道府県だと、一人のできる医師が欠けても替わりはたくさんいるんです。ところが人口の少ない県は違います。特に腎臓のようなスペシャルな分野においては、一人が欠けると、同様の力のある医師はいないということになりがちなんです。鳥取県だけではなく、地方はどこも同じ問題を抱えています」

大学病院の本分は、地域の人々に高度医療を継続的に提供することだと武中は考えている。新型コロナウィルスという影響もあったにしろ、腎センターを立ち上げる前の2年間で、とりだい病院での腎臓移植は2件のみ。彼の背中を押したのは、地元の腎臓病患者たちの会からの、どこの病院に相談したらいいのか分からないという声だった。

「何かの病気になるって、わざわざ都市の病院に行かなくてはならないという状態では、地域の人々が安心できない。特定機能病院が高度医療を提供することは当然です。加えて継続するには、人材育成が不可欠。医学部がある大学病院がやるしかないんです」

武中の念頭にあったのは、2011年2月に元病院長の北野博也が立ち上げた、とりだい病院の「低侵襲外科センター」である。低侵襲外科センターには、ロボット支援手術を行うすべての外科分野を集めた。各科横断の組織とすることで、大学病院の宿痾<sup>しゅこ</sup>ともいえる各診療科

表：慢性腎臓病の重症度分類

尿蛋白の程度					
(-)		(±)	(+)～		
正常		軽度蛋白尿	高度蛋白尿		
糸球体濾過量 (GFR) 区分	正常または高値	≥ 90			
	正常または軽度低下	60 ～ 89			
	軽度～中等度低下	45 ～ 59			
	中等度～高度低下	30 ～ 44			
	高度低下	15 ～ 29			
	末期腎不全	< 15			

GFR 値と尿蛋白の程度によって分類。緑は正常。黄、オレンジ、赤の順に腎不全、心血管死の危険が高まるエビデンスに基づくCKD診療ガイドライン2018より改変

の壁、平たく言えば、縄張り意識<sup>を</sup>を溶かし、病院全体を活性化させた。低侵襲外科センターは現在、2種類の手術支援ロボットを稼働、今後も新機種を導入し、とりだい病院のロボット支援手術をさらに全国屈指のレベルに高めていく予定だ。もともと、とりだい病院は各診療科の垣根が低い。しかし、全くないわけではない。特に内科と外科はかなり肌合いが違ふ。腎センターによって、腎臓内科と外科系である泌尿器科の交流が活発になるだろう、それが病院、そして患者の利益になるはずだ。と武中は考えたのだ。

引田はこう言う。

「（移植を担当する）泌尿器科は患者さんがどんなふうに腎臓が悪くなったかという過程を詳しく知らないことが多かった。腎センターができたことで、腎臓内科ともカンファレンス（会議）を定期的に行うようになって、患者さんのことをもっと知ることができるようになった。我々も（腎臓内科の管轄である）透析室に気軽に出入りして、意見交換したり、移植した患者さんを腎臓内科の先生と一緒に回診しています」

ちよっとしたことでも相談できるようになって助かっていますと笑った。

2022年の腎臓移植は3件、腎センターはまだまよちよち歩きの状態である。まだまだ、これから。ただ、地域の腎臓を守るという彼らの目線はあくまで高い。





カメラ フォトルポルタージュ

# 病院×神楽

写真家・中村 治が映画『高津川』

の「左鐙社中」公演を熟写

映画の中の神楽練習場は、彼らが日々使用している稽古場である。

明治の初期までは、神楽は神主などの神職が舞っていたという。神職への神楽禁止令により、日本全国どの地域も村人に神楽が継承されるようになった。左鐙社中の方々も、普段は会社や役場などに勤めながら、週一度の練習の他、週に一度の子ども神楽への指導、週末の各地での公演を行なっている。

この日、子ども神楽、そして付き添いの親御さんを含めた総勢25名は、病院の多目的ホールに着くやいなや、慌ただしく準備を始めた。誰が指示することもなく、全員がそれぞれの役割を見つけ、自然と連携して動く手際の良さに、ほくは圧倒された。そして2時間後、ホールはあつという間に、神楽の公演会場へと変貌した。

まずは満員のホールにお囃子の太鼓が打ち鳴らされ、神を迎え場を清めるための舞である『塩祓』。続く『塵輪』では、ダイナミックで緩急をつけた演舞、そして『恵比須』では恵比須様の滑稽な動きと、腰につけた籠からお菓子が撒き降らされた。会場の子どもたちは大喜びである。

場内の温度が一段高くなったかと錯覚したのは『天神』だった。子ども神楽——中学生たちの、目にも止まらない速さとキレのある演舞に目を見張った。彼らは映画『高津川』にも登場している。映画の最後で舞った小学生2人がこんなに

左鐙社中は、2トントラックに公演の道具を満載にし、早朝から片道250キロの道のりを、4時間半かけてとりだしい病院へやって来た。彼らのホームタウン津和野市左鐙町は、山陰地方の東端、日本海沿いの益田市から南へ約30キロ。錦織良成監督の映画『高津川』の舞台となった清流が流れる山間部である。映画をご覧になった方には、廃校になった小学校がある村、と言えはお分かりになるだろう。彼ら、彼女たちも映画に登場、

病院は「社会的共通資本」とあるという原田 省病院長の考えで、とりだしい病院は数々の文化発信を行なっている。2022年春、外来入口横に新設された「ゲストハウス棟」の多目的ホールでは、映画上映、コンサートなどを開催している。この秋、とりだしい病院にやって来たのは石見神楽の「左鐙社中」。神楽とは、神を祭るために奏する歌舞のことだ。錦織良成監督の映画『高津川』の舞台となった島根県津和野町の左鐙社中にとっては鳥取県初公演。病院での神楽公演は日本初、いや世界初だろう。「さがみはら写真新人奨励賞」受賞の気鋭の写真家がこの公演に密着取材した。





大きくなったのだ。最後の『大蛇』では、6頭の大蛇が演台のない舞台を縦横無尽に這い回り、その胴体が客の足元まで迫った。終演後、止まらない拍手に観客の興奮と感動が強く込められていた。感

動で涙ぐんでいるお客さんもいたほどだ。映画と同じように少子化により左鐙の小学校は廃校となった。しかし、昨年、保育園の園舎が新築された。多くの若い夫婦が左鐙に戻り始めたのだ。いずれ小

学校が再開される可能性もある。故郷に戻る理由のひとつに、また神楽を地元でやりたいから、という若者も多いと聞いた。神楽をはじめとした伝統文化は、少子化を食い止め、地域を活性化させる鍵

となるかもしれない。いつの日か左鐙で小学校が開校されたとき、記念式典では、左鐙社中が晴れやかに舞っていることだろう。

写真家 中村治



## 7 倉吉市 お菓子処かわしまの いちご大福



## 8 琴浦町 パティスリーモンテの 瓶パフェ



## 5 境港市 喫茶クロの あべかわ餅



## 6 境港市 Hayami 洋菓子店の チーズケーキ



## スイーツ上田の「山陰」これ食ったときゃ間違いない！



「高度熱傷治療」の専門家でもある、高度救命救急センターの上田敬博教授。外見は無骨な九州男児にも関わらず（失礼！）、無類のスイーツ好き。休みの日にはケーキから和菓子まで美味しいスイーツを求めて、山陰各地に出発しています。そんなスイーツ上田の「推し皿」を秘蔵の写真とともに紹介。

文・写真 上田敬博 人物写真 中村 治 構成 大川真紀

## 3 米子市 Hiromi スイーツカフェの わらび餅



## 1 米子市 LAND&YEARS の レアチーズケーキ



## 4 米子市 Non Cafe の パンケーキ



## 2 米子市 フルーツカフェサエキの 苺のかき氷







株式会社ミキハウス 代表取締役社長  
**木村 皓一**

写真・中村 治

病院長が時代のキーパーソンに突撃！

# たすけのタスク

産科婦人科医でもある原田省とりだい病院長は、お産を迎えるお母さんたちを見守ってきました。  
そんな病院長のところに、ミキハウスから素敵なお品『プレゼントボックス』の提案が。  
質にこだわり、オンリーワンのブランドづくりを目指していく想いを、  
ユーモアを交えながら語り合いました。

世界の富裕層から教えてもらったミキハウスの価値

**原田** 今回の対談はミキハウスの『プレゼントボックス』をとりだい病院で提供して頂いたお礼から始めさせていただきます。  
(プレゼントボックスを持ちながら) この透明のカバーの素材と(画家の)朝倉(弘平)さんの絵が合っている。とりだい病院の広報誌『トリシル』の表紙に使った絵を使用していただきました。すごいですよね。  
**木村** 他の病院でもプレゼントボックスをやっているんですが、とりだい病院ならではのデザインで可愛いね(笑い)。  
**原田** 2022年9月12日から、とりだい病院で出産したお母さんすべてに、プレゼントボックスをお渡ししています。最初は2021年の夏ぐらいに、慶應義塾大学医学部名誉教授の吉村泰典先生から慶應義塾大学医学部附属病院が、赤ちゃんが生まれたご家族のために、病院とミキハウスで相談をしながら内容を決めた新生児用品が入ったプレゼントボックスを渡しているという話を聞きました。  
**木村** 吉村先生と原田病院長は同じ産科婦人科ですね。  
**原田** 吉村先生は尊敬する先輩で、とりだい病院の運営諮問委員にもなっています。慶應義塾大学の話を聞いて、オリジナルのプレゼントボックスは

うちでもできますかって相談したところ吉村先生から木村社長を紹介していただいた。楽しい社長さんだから会っておいた方がいいとも(笑い)。日本では少子化が進んでいます。少しでもご家族の助けになりたい、というお考えから始められたんでしょうか？

**木村** それもありますが、日本の繊維業界は技術が高くて、ものすごく質の高いものを作る力がある。ところがその良いものを安く売ってしまう傾向がある。

**原田** 子ども服に限らず、日本はずっとデフレが続いてきましたね。他の先進国と比べると給料も安いけれど、物価も低い。木村(領いて) 良いものを作っても売価が上がらない。当然、働いている技術者の給料も上がらない。凄く技術を持っている、いい商品を作るのに辞めていく。そういう環境だと良いものを継続的に作っていくことはできない。ぼくたちは良い物を作って、お客さまに喜んでいただきたい。同時に職人さん、技術者にもその対価をきちんと支払いたい。そのために、職人さんの素晴らしい技術に見合った適正な価格を付ける必要があります。

**原田** 恥ずかしいながら、ぼくはミキハウスの商品の品質が良くて、価格が高いことを知りませんでした。振り返ってみれば、うちの息子が小さい頃、ミキハウスのブレザーを着ていたという記憶があります。  
**木村** ミキハウスの商品は高いかもしれ

ませんが、質がいいので長持ちする。プレゼントボックスでその品質の良さを実感してもらいたいと考えたんです。

ミキハウスはロンドンの(老舗高級百貨店)ハロッズに10年ほど前に出店しています。アルマーニとバーバリーの間にミキハウスがあったんです。私が視察に行ったとき、値札を見たら、ずいぶん高い。日本円に換算すると日本の3倍くらいの値がついている。「これ、値付け間違えている」って指摘すると、店長からは「順調に売れています」という答えが返ってきたんです。世界の富裕層から見れば、それくらいの価値のある商品だということとを逆に教わりました。ようやく日本国内でも同程度の価格設定をできるようになってきたところです。

**原田** 山陰のもののづくりの現場でも同じようなことが起きていると聞きます。職人たちが食べていけないので、後継者が育たない。いい手仕事の作品、商品は正當な値段で売らなければならない。

今はどこに会社があっても一緒ですよ

**原田** 木村社長は創業当時から、品質にこだわっておられたと聞きます。  
**木村** 最初は一人で試行錯誤しながらやっていましたね。自分のところの商品がどれだけ耐久性があるのか確かめるために洗濯機を回し続けたこともあります。

ぼく、洗濯好きなんです(笑い)。洗濯機、何個潰したか分からんぐらい。だからこそ自信を持っています。

**原田** 洗濯機からヒット作も生まれたとか。

**木村** あるときデニム生地を使い始めたんです。ところが、デニム生地は色落ちなかつたんです。洗濯したときに白い洋服が染まってしまったと、クレームが来しました。デニムが色落ちするのは当たり前なんですけど、やっぱりそれを使ったこつちが悪いんです。それで洗濯して色落ちさせてから出荷することもしました。デニムって洗濯すると縮む。縮む分は計算しているんですが、少し皺になる。新品なのにこれでいいんだろうかと、恐る恐る店に出してみたら「この皺がええ」って喜んでくれたんです。それで石ころ入れて洗濯機を回して独特の模様を出すこともやりました。

**原田** ストーンウォッシュですね。

**木村** ストーンウォッシュ加工には本当は軽石を使うんです。ぼくは普通の石ころを入れたから、洗濯機がすぐに駄目になった(笑い)。

**原田** 話は変わりますが、地方の大学の病院長としては、ミキハウスが八尾市という、大阪の中心部から離れた場所に本社を置いていることに興味があります。ある程度規模が大きくなると、本社を東京に移すという企業も少なくないですよ



ね。

**木村**（大きく手を振って）もう今はどこに会社があっても一緒ですよ。

**原田** 確かに今となつてはリモートワークが一般的になりましたが、ミキハウスは一貫してこの場所から動いていない。

**木村** 本社の位置より、どうしたらいい商品を安定供給できるかの方を気にしていました。ただ、設計にはこだわりました。この本ビルを建てたのは今から約30年前、創業15年ぐらいたった頃でした。誰に設計を頼もうかと調べていたら、やはり（建築家の）黒川紀章さんだと。それで会いに行ったんですが、（首をひねる仕草で）八尾に本社？ あかんあかんはよ、帰りって感じで門前払い（笑い）。

**原田** まだミキハウスの知名度がなかったんでしょうか。

**木村** 3回目にJAL（日本航空）とANA（全日本空輸）、そして新幹線グリーン車の機内誌を持って行ったんです。ここに広告を出している会社です、図面引いてもらえませんか。そうしたら分かったって、設計してくれました（笑い）。

**原田** 木村社長の中にこうあるべきという理想がはっきりあって、ぶれずに一直線に行く。そして八尾から



世界中に展開しておられる。とりだい病院では新病院構想が始まっています。ローカーとグローバルの両立という観点でも木村社長のやり方は参考になるかもしれません。

**木村** ぼくたちアパレルの世界で、日本国内だけのビジネスを考えたらもう大不調です。ミキハウスのグループの売上のうち、だいたい6割が国外です。現時点で国内直営店が約120店舗。国外では、パリ、ロンドン、モスクワ、キウ、シンガポール、ホーチミン、ジャカルタ、北京、上海、ソウル、メルボルンなど世界各都市に90店舗を展開しています。2022年末に、シンガポールのマリーナベイ・サンズの

中にある高級ショッピングモールに直営店を開きました。

**原田** マリーナベイ・サンズは屋上にプールがあることで有名なラグジュアリーホテルですね。世界で最も勢いのあるアジアの富裕層から、高級ブランドとして認められたということになります。先ほど、日本と海外の売値が違うという話をされましたが、現在もそうなのですか？

**木村** 海外では、輸出などの経費がかかるので上乗せして価格をつけています。

**原田** 今はインターネットの時代ですから、日本で買って付けて送るなどの裏技も横行するのではないですか？

**木村** それがありませんですよ。ネットの世界では偽物も出回っているじゃないですか。ミキハウスの顧客は値段の安さよりも、本物を手に入れる方が大切だと考えているのかもしれない。

**お客さんが納得できるものしか作らない、売らない**



**原田** ミキハウスといえば、柔道や空手、卓球、アーチェリー、テニス、水泳などのアスリートを支援していることでも知られています。東京五輪には11人も所属選手が出場、空手女子の清水希容さん、レスリング男子の文田健一郎さんが銀メダルを獲得しました。こうしたアスリートたちはどんな観点で選んでおられるんですか？

**原田** 控えめな山陰人では考えられない（笑い）。そこまで言ってくるというのは優秀な方なんでしょうね？

**木村** 優秀も優秀、実力あるんですよ。今までに中国で新店を40店舗ぐらい立ち上げたんじゃないかな。

**原田** 国際化といえば、我々のような病院でも新型コロナウイルスによって国外との交流が途絶えてしまった。これをいかに回復するか、です。

**木村** これからの日本はいろんな国の人を受け入れていかないと、ほんとうにしんどくなります。

**原田** 将来的には海外に生産拠点を移すという考えはありますか？

**木村** それは無理でしょう。なかなか日本と同じ品質で作るのは難しい。しかし、日本国内から職人がいなくなっているというところもあり、クオリティが日本と同様に高く作れる場合は、今も一部海外で生産しています。品質は絶対に妥協できないので、あくまでも我々の品質基準がクリアできる範囲内に限ります。私たちのお客さんが納得できるものしか作らない、売らない。売れるからなんでもかんでもやるというのではないです。

**原田** オンリーワンのこだわりですね。我々とりだい病院もオンリーワン、ブランド力を高めていかなければならないとつくづく思いました。今日はありがとうございました。

**木村** いろいろなご縁もありますね。世界で活躍できる実力もあって、競技を続けていきたい気持ちもある。でもなかなかスポンサーもつかず環境や金銭面など一人ひとりさまざまな要因で競技を続けることが難しい。東京五輪に出場したカヌーの羽根田卓也選手の場合は、彼から手紙が来たんです。それまでお父様がサポートしてくださっていたけど、ロンドン五輪までが限界だと。いろんなつながりのあるところに話を持ち込んだけど、断られたっていうんです。

**原田** カヌーはマイナースポーツなので露出が少ない。宣伝という観点で見るとあまり魅力的ではないかもしれません。

**木村**（大きく手を振って）うちは宣伝とか考えていません。調べてみたらロンドン五輪で7位入賞しているんです。そんな選手でも支援を必要としている状況でした。彼の話の聞くと、将来のビジョンやプロセスが明確で、高校を卒業してから単身スロバキアに渡るほどカヌーに懸けていたんです。その競技に対する強い想いを応援することにしました。そうしたら、リオデジャネイロ五輪で日本人初の銅メダルを獲った。その後は、以前断ってきた企業がスポンサーすると言いつたそうです。でも彼はそっちに行かなかった。

**原田** 雨の日の友だちを大切にした（笑い）。プレゼントボックス提供も同じですが、社長の気持ち、強い想いを感じます。



木村皓一 株式会社ミキハウス 代表取締役社長  
1945年滋賀県生まれ。  
1970年に父の経営する大阪の婦人服メーカーに入社し、アパレル事業の実務を学ぶ。1971年に大阪府八尾市でベビー・子供服製造卸「三起産業」として創業。世界に通用する高級ベビー・子供服ブランドを作り上げ、国内だけでなくパリの路面店や中国、シンガポールの位置づけをゆるぎないものとしつつある。また子どもに関わる環境すべてを対象に、子育て支援事業や教育事業など様々な事業を展開している。さらに柔道・卓球・水泳・アーチェリー・空手など多岐にわたる競技でスポーツ選手を長年にわたり支援し日本スポーツ界の振興に貢献しており、地域の子どもたちのための柔道教室の運営やジュニアの卓球選手の育成など、幅広いスポーツ支援を行なっている。

原田省 鳥取大学医学部附属病院長

1958年兵庫県出身。鳥取大学医学部卒業、同学部産科婦人科学教室入局。英国リーズ大学、大阪大学医学部第三内科留學。2008年産科婦人科教授。2012年副病院長。2017年鳥取大学副学長および医学部附属病院長に就任。患者さんとともにつくるトップブランド病院を目指し、未来につながる医学の発展と医療人の育成に努めながら、患者さん、職員、そして地域に愛される病院づくりに積極的に取り組んでいる。好きな言葉は「置かれた場所で咲きなさい」。



# ふみ日記

第四回

“脇道”の  
景色も  
また楽し

昨夏、米子北高校で開催された読書会に、講師としてお招きいただいた。その際、参加した生徒の方に前もってアンケートに答えてもらったところ、「今一番関心があること」という質問に対し、「自分の進路」という回答があった。進路。そりゃあ気になるよな」と頷きつつ、自身の高校時代を思い出した。ちょうど、今から10年前の話だ。

当時、私はとある国立大を志望していた。いい大学だと、かねてから聞いていたし、オープンキャンパスに行つて、その街のゆったりした雰囲気も気に入っていた。関心のある分野（日本古典文学）をしつかり学べるカリキュラムも、大変魅力的だった。

だが肝心の成績は振るわず、模試ではDもしくはE判定を連発していた。ちなみにD判定は合格率30%、E判定は20%以下である。

こんな成績では受かりっこない。でも、志望校は変えたくない。

正直、何度も葛藤した。悩んで悩んで、勉強が手につかなくなりそうだった（本末転倒である！）。そんなときは決まつて、先輩たちの合格体験記を読むことにしていた。

進路の手引書や、受験専門誌に載っていたそれらは、「合格」体験記と銘打っているだけあつて、素晴らしい成功例が揃っていた。中には、1ヶ月で偏差値を10も20もアップさせたり、E判定から見事合格を決めたりと、大逆転を果たしている方もいた。そうした成功談を読んで「よし、私も」とやる気になったことは、言うまでもない。

その後も時々心が折れそうになったけれど、毎日必死で勉強し、センター試験当日を迎えた。毎年同じ場所で開催されているので存じの方も多いと思うが、会場はここ、鳥取大学の米子キャンパスだった。

当然のことながら、普段受けている模試とは、全く雰囲気違った。だだっ広い試験場には大勢の受験者が詰め込まれ、尋常でないほどの緊張感が漂っていた。その空気に、私は完全に吞まれてしまった。早い話が、散々な出来だったのだ。

特に、数ⅠAがひどかった。ただでさえ数学が苦手なのに、今まで解いたことのないような問題が出され、頭の中が真っ白になった。結果、自己最低点を叩き出してしまった。（50点満点ならよかったのになと思うような点だった）その

他の科目でも、案の定終始慌てふためいていた。自己採点するまでもなく、志望校の合格ラインに届いていないことは明白だった。帰宅するやいなや、こう泣き叫んだことを、今でもはっきり覚えている。「こんなじゃ、どの大学にも行けないよ！」

それだけ大騒ぎしておきながら、どうしても諦めきれず、結局は第一志望の大学を受験した。もちろん、合格体験記のような展開にはならなかった。

だが、思わぬ縁もあった。併願していた私立大学が、たまたま拾つてくれたのだ。そうして私は、生まれ育った鳥取を離れ、京都で4年間学ぶことになった。

「自分のしたい勉強は、第一志望でなきゃできない！」と思い込んでいたが、いざ進学してみると、そうでもなかったことが判明した。むしろ、日本古典文学に関しては、志望校よりカリキュラムが充実しているくらいだった。（何と言つても『枕草子』や『源氏物語』など、日本文学史に燦然と輝く作品が数多く生まれている地だ。図書館には膨大な量の資料が揃っていたし、学べる分野も細かく分かれていた）

そればかりか、大きな転機も訪れた。大学3年生の夏、文章表現を学ぶ授業を受けたことがきっかけで、小説のほんとうの面白さに気づき、作家を目指すようになったのだ。

もしあの授業を受けていなければ、もし奇跡を起こして第一志望に合格してい

## 「親が死ぬまでにしたい55のこと」

親孝行実行委員会 / 編



とりだい病院の1階に薬剤部がある。そこで医薬品情報の管理を任されているのが森木邦明だ。医薬品情報の収集して院内に情報提供し、電子カルテシステムを活用して院内で薬が適正に使用できる仕組みを管理している。真面目で温厚——周囲の仲間は、彼のことをそう評す。そんな彼が紹介した本は「親が死ぬまでにしたい55のこと」だった。

森木がこの本に出会ったのは2010年。普段から書店に通う彼は、その日も積まれている本をいろいろ見て回っていた。なぜかこの本のタイトルに目が止まり手に取った。前年に第一子が生まれており、「自分も親という同じ立場になったからなのか、親のことを思い返してみようと思ったんです」と静かに話した。森木の父は大病院の臨床検査技師、母は小学校の養護教諭だった。父は土日でも職場に行くことがあり、彼もよくついて行った。そして、側でお絵描きや漫画を読みながら、仕事に向き合う父の姿を見ていた。明るい母は自分の子どもだけでなく、児童や地域の人たちにもいつも優しく接していた。今と比較して子育ての環境が整っていない中、仕事との両立はとても大変だっただろう。それをおくびにも出さず、子どもたちのやりたいこと、好きな道を進ませてくれた。

本を読み終えると、親から惜しみない愛情を受けて育ったことに気がつき、また両親の思考や行動、仕事に対する姿勢が知らず知らずのうちに自分に引き継がれていると思った。

現在、森木は両親と離れて暮らしている。会に行くのは元々「盆と正月だけ」であり、その回数は年々減ってきているという。自分も親にできることはないかと本の中のいくつかの試みを行動に移した。「照れもあった、やれたことは、親を旅行に連れて行く、家族揃つての記念写真を

撮る、親を人間ドックに招待する、でした」

中学生の頃、母親が入院し手術をしたことがあった。胃潰瘍であると聞かされていたが、とりだい病院に動機、さまざまな病気の患者さんの治療に薬剤師として関わるうちに、あの時の母親の病気が胃がんでなかったのかと思うようになった。当時はがん告知の義務はなかった。母親自身も知らず父親の胸の中で留めたのか、もしくは自分ら兄妹に心配をかけないように知らせなかったのか。いずれにせよ、病気を乗り越えて自分たちを育ててくれた両親へ、感謝とこれから健康が続くことを願つて、3人の兄妹が費用を出して人間ドックを提案したのだった。

「結果は異常なし。本当に良かったです」と彼は笑う。

本には他にも20代〜40代の方が書いた親への想いが写真とともに綴られている。確かに親と過す時間は限られている。と同時に我が子との時間も有限である。「今度は自分が子どもに対し、親の背中を感じてもらえるよう、見られて恥ずかしいない生き方をしよう」と改めて思いました」

先日、森木は家系図を作ってみようかと両親に提案した。この本をきっかけに、「親子」としての人生を有意義なものにしようとしていたのだ。

文・中原由依子 写真・中村治

本は命の泉である

とりだい「人生を変えた一冊」

薬剤部  
森木邦明

カニジルご意見箱

通称

## カニ二箱



とりだい病院内にあるカニジルブックストアに御書印を書いていただくために訪れたとき、「カニジル」を初めて読ませていただきました。病院広報誌で読み応えがあって、ためになって、写真もよくて感動しました！バックナンバーもじっくり読んでみたいと思います。

「カニジル」初体験で、制作側のこう伝えればいいな、というポイントを的確に表現してくださり、ありがとうございます。現在、入手困難な号もありますが、専用サイトではバックナンバーをすべて掲載しております。当院職員の輝きと、編集チームの汗と涙（？）の歴史がぎゅっと詰まっています。ぜひご覧ください。（大川）

カニジル  
サイト  
QRコード



カニジルへのご意見・ご感想を募集中！



[www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanijiru/e/](http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanijiru/e/)

とりだい病院ホームページからもアクセスできます。  
トップ > 病院のご紹介 > 当院の広報物 > 読者アンケート回答フォーム

抽選で  
カニジル  
ステッカー  
プレゼント！



※ステッカーの種類は選べません。



鈴村ふみ

1995年、鳥取県米子市生まれ。立命館大学文学部卒業。第33回小説すばる新人賞受賞作『櫓太鼓がきこえる』（集英社）でデビュー。小説家であり、とりだい病院1階のカニジルブックストア店長。

たら、今頃作家にはなっていないかったかもしれない。無論、病院内にある書店の店長になることもなかっただろう。どちらでも、「第一志望でなければだめだ」と足掻いていた頃には、とても想像できなかった未来だ。

合格体験記を書いた先輩方は、きっと大変な努力を重ね、自らの夢を叶えたのだろう。それは非常に素晴らしいことだし、爪の垢を煎じて飲ませてほしいと思う。

だけど、望んだ通りの道が最善だとは限らない。最初は目もくれなかった脇道にも、案外楽しい景色が広がっているかもしれない。

不合格者の声なんて、縁起でもないから受験生には読まされられないけれど、このコラムでならいいだろう。受験生のみならず、どうか気負わずに試験に臨んでほしい。そして進路に悩んでいたあの生徒さんも、「これでよかった」と、心の底から思える選択ができますように。



## 現場を知ることの大切さ

新型コロナウイルスの感染が少し収まり、海外から友人や関係者が日本に続々と訪れるようになってきた。先日はチェコの首都・プラハ在住の友人、そしてその前は、英国・ロンドン。アメリカ・サンフランシスコからも親友が帰国して久しぶりに旧交を温めた。彼らとコロナ禍の間も、リモートやメールで会話は続けていたが、やはり、リアルで会い、食事をしながら、異国の事情や話を聞くのは格別。ばく自身、この3年余り海外に渡航していないから、余計に生の情報は新鮮に感じる。

## Tottori Breath

ロシアのウクライナ侵攻影響やエネルギー事情、新型コロナウイルスへの対応や市井の人々の暮らしぶり。多くの質問は尽きない。コロナ感染によって海外ではどんな混乱が有り、どう克服し、現在はどんなっているのか。自然と多くの持っている情報や見方の裏付けを取りながら、時代の波や潮目を見るのに食欲になってしまふ。「なんだか取材されているみたいだよ」と友人が笑う。長年テレビの取材をしてきた多くの悪い癖がまた出てしまった。テレビや新聞が伝えている情報は、総論的な情報や記者が取材した、あるひとつの側面を切り取った断片に過ぎない。ニュース枠や紙面の制約、視聴者や読者が受け取るニュースのバリエーションもある。また、記者の恣意的な見方にフォーカスされてしまった情報も少なくない。その国の政治と庶民の日々の暮らし。本当は、自分がそこに行き、土地の上に立たないと正しくは分からないとばかりは感じている。

演し好評を博す「カニジララジオ」（山陰放送ラジオ）毎週土曜日0時25分放送）では、「カニジラ10号発刊・カニジララジオ1000回放送記念祝賀会 特別公開録音」として10月15日にスペシャル放送が行われた。

メインパーソナリティー・田崎健太カニジラ編集長の軽妙洒落なリードに誘われて原田省病院長や武中篤副病院長、木野村尚子アナウンサーが、「広報誌カニジラ」と「カニジララジオ」の誕生秘話を披露。地域医療ととりだいの病院の役割、そして未来の病院の姿を熱く語っている。

聞き逃した方は、とりだいの病院公式Web「カニジララジオ」(<https://www2hosp.med.tottori-u.ac.jp/kanjiru/radio/>)、あるいは、YouTube「BS山陰放送ラッテチャンネル」でお聞きいただければ幸いだ。（バックナンバーも掲載。声に加えて収録時の出演者の表情がわかる動画つきで見られますよ）

この中でやはり中心になったのは、とりだいの病院の手術支援ロボットの充実ぶりである。米国製の画期的な手術支援ロボット「ダビンチ」がとりだいの病院に導入されたのは2010年。18年には2台目が稼働。年間8000件の手術のうち約300件でロボット手術が行われてきた。そして、22年2月には、国産初の「hinotori（ヒノトリ）」が、中国地方の病院で初めて導入された。全国の病院でも8例目。従来の手術支援ロボットより可動域が広く汎用性も高い。

ロボット手術を米国で学び、とりだいの病院で低侵襲外科センター長としてロボット手術をリードしてきた、泌尿器科医の武中副病院長は「神の手よりもロボットは正確。誰でも熟練をし、チーム

## 鳥取大学医学科生Ⅱ医師のたまご



取材・文 井野寿音  
写真 中村治

鳥取大学医学部医学科5年生の柳江健治は、少々変わった経歴の持ち主である。

岐阜県の高校から名古屋大学経済学部に進学。銀行に4年間勤務した後、公認会計士を目指して銀行を辞めた。アルバイトをしながら公認会計士の資格を目指して勉強したが、合格後の就職は年齢的に厳しいと知り、資格取得は断念。そして居酒屋で契約社員の店長として働いていたとき、医師を志した。30代半ばのことだった。

「今までは自分のために楽に生きてきたから、少し

は世の中のためになるようなことをしたいと思ったのがきっかけです」

勉強時間を捻出するため、居酒屋の店長を辞めて、工場のライン工やリゾートホテルのウェイターとして住み込みで働いた。そこでは派遣会社の名前で、あるいは「眼鏡」と呼ばれて悔しい思いをしたこともあった。実力主義であるはずの受験でも「年齢差別」があった。ある大学の医学部では不合格の後、開示を求めると年齢で大量に点数を引かれていた。また、「あなたのような年齢の人で未だに受験なんてご両親は泣いていませんか、医師として育てるのは税金の無駄だ」と面接で言われたこともあった。

同じように社会人を経て医学科に入学した知人が在籍していたことから鳥取大学を受験。鳥取とは縁もゆかりもなかった。それでもなんとか合格。

しかし。医学部に入ってから苦勞の連続である。「同級生がすぐに習得できる手技を、何回見せてもらっても同じようにはできない。その分、朝早く行ったり居残りをして、人の2倍練習しています」

将来は内科系か精神科に進むことを考えている。「医者の世界では定年はあつてないようなもの。一生医師として働くつもりです」と明るく笑う。その笑顔からは回り道をした人間にしかない優しさが確かに感じられた。



医学部医学科5年 柳江健治さん

でいいサポートをすれば高品質で安全性の高い手術を行える」と語る。

スマートホスピタルを目指し、変化するとりだいの病院。診療科や職種の枠を越え、連携するチーム医療を拡充してきた。これもロボット手術の発展には欠かせない。

原田病院長、そして我々「カニジラ」は、病院は「社会的共通資本」であると言い続けてきた。ご存じのようにこれは米子出身の世界的経済学者、宇沢弘文氏の言葉で、「豊かな社会は、各人が相応しい職業につき、幸福で、安定的な家庭を営み、安らかで、文化的水準の高い一生をおくることのできる社会」を意味する。

その実現条件として宇沢氏は、「豊かな自然環境の持続的維持」「文化的環境の創出」「子どもの能力を開花できる教育」、最後に「疾病、傷害に対する最高水準の医療を享受できる施設が存在」をあげている。

医療も病院も現場が大切。市民の声に耳を傾け、病院の外に出て話を聞く。そこに真実がある。同様にカニジラ読者の皆さんには「病院を知ること」の大切さを忘れないで欲しい。新しい技術を導入し、動かす医師や看護師、スタッフ。彼らもチャレンジし、夢を持ち、命を守るという使命を胸に日々奮闘しているから。



結城豊弘

1962年鳥取県境港市生まれ。テレビプロデューサー。とりだいの病院特別顧問と本誌スーパーバイザーを務める。鳥取県アドバイザースタッフ。境港観光協会会長。

## 飛鳥の森



〈飛鳥の森とは〉

鳥取大学医学部キャンパス内にある、学生や患者さんが集う憩いの場。「飛鳥（ひちょう）」という言葉には、鳥取大学の一層の飛躍を願う気持ちが込められている。

編集 田崎健太

雑誌はそれ自体が意思を持った生き物のようなもの。誰かが手を抜くとぐったりしてしまいます。質を保ちながら継続するには、スタッフの熱意、規律、そして仲間を思う気持ちが必要。ご存じのようにこの『カニジラ』は東京在住のスタッフととりだいの病院広報チームとで運営しています。取材日程の制限、人材確保——内実は綱渡りのような状態でした。そのほころびも出てきたので、次号から体制一新します。また左鑑神楽の大蛇のように精気をみなぎらせますので乞うご期待。

中村 治

今回の特集では神楽を撮影させてもらった。左鑑社中が舞った石見神楽の演目には、出雲の神々が多く登場する。出雲の神々は、雨がお好きだと聞いたことがある。秋晴れが広がる公演当日の朝、左鑑社中がとりだいの病院へ到着し、特集見開きの撮影直後から雲行きが怪しくなった。公演後に外に出ると、アスファルトがすっかり濡れていて、まだ小雨がふっていた。撤収を終え、社中が左鑑に戻る頃には、元の秋晴れへ。美しい衣装に刺繍された龍が飛び出し、また石見へと戻って行ったようだ。





〒683-8504 鳥取県米子市西町36番地一  
鳥取大学医学部附属病院 広報・企画戦略センター内「カニジル」編集部  
TEL 0859-3817039 / FAX 0859-3816992  
MAIL byouin-kouhou@med.toridai-u.ac.jp



フォトグラファー中村 治が切り取る  
とりだい病院の日常

トリビート

中村 治

1971年広島生まれ。成蹊大学文学部を卒業後、中国・北京に2年間留学。ロイター通信社北京支局の現地通信員としてキャリアをスタート。ポートレート撮影の第一人者である坂田栄一郎氏に師事。2006年に独立、現在は雑誌広告等のポートレート撮影を中心に活動している。中国福建省の客家土楼とそこに暮らす人々を撮影した写真集『HOME』、2021年12月にはネオンサインを集めた『NEON NEON』(リトルマンブックス)を出版。2020年「さがみはら写真新人奨励賞」受賞。



check!

とりだい情報  
日々発信中!



www.facebook.com/ToridaiHospital/



@ToridaiHospital